

(財)日本クリスチャン・アカデミー 関西セミナーハウス

活動センターだより

2010年度 第1号 (3月15日発行)

2010年3月～2010年10月プログラム報告

2009年度 修学院フォーラム「生命」 — iPS細胞の時代におけるキリスト教の生命倫理 —

第4回 「キリスト教と遺伝子介入」

2010年3月13日 (土) 13:30～17:30

講師： 伏木 信次 (京都府立医科大学教授)

鈴木 和哉 (日本キリスト教会吉田教会牧師)

このシリーズのプログラムの第4回、最終回である。このプログラムの特徴は、毎回医学と神学の双方の専門家からの発題を聞いて、参加者が自由にはなしあうところにある。

今回の医学側の講師の伏木さんは、病理学の専門家で、医療倫理・生命倫理に関する著書もある人である。



同氏は、医学とは、病いを持つ人間に対する癒しの学であると同時に、人間の病に対する科学的認識の深化を図る学問であるとし、医学は後者の面でデカルト以後急速に発達し、病気を遺伝子で

理解し、遺伝子操作により病気を治療するだけでなく、人の性格や能力を変え得るまでになったこと、それ故に私たちは、何を伸ばし、何を断念するべきかを考えなければならぬことを話された。

続いて鈴木さんは、教会と神学は、科学とりわけ生命科学の発達に対し、これまでどう関わってきたか、旧約聖書と新約聖書から人間と生命に関するメッセージをどう聞いてきたかを紹介し、人間が生命操作に関し大きな力を持つに至った今、私達は聖書からどんなメッセージを受け取り、それ

を社会にどう発信していくべきかと問いかれた。

その後、伏木さんの示されたいくつかの具体的ケースについて、私達はどう考えるべきかを参加者が様々な角度からはなし合った。参加者は、主婦、教師、牧師、医師など23名にのぼり、この問題にたいする関心の大きさを感じさせた。このプログラムのように、生命倫理を主題とし、医学と神学の双方からの発題を受け、様々な立場の人が自由に話し合い、議論を積み重ねていく会は珍しく、アカデミーの特徴を生かした会として今後も伸ばしたいと感じた。

(小久保 正 中部大学生命健康科学部教授)



《参加者アンケートから》

- ・最先端の本当の話がきけた。
- ・高齢と共に、万物の霊長として、如何に“死”を迎えるか・・・など、ふわーと考えて居ましたが、何となく考え方のcoreが出来て来た様な気が致しました。

2010年度 プログラム

2010年度 お茶とキリスト教研究会 第1回

「お茶を楽しみながら、聖書のみ言を静聴し、お茶とキリスト教の歴史的な関わりについて学ぶ会」

2010年4月2日（金）13:30～17:00

講師：小林 哲夫（茶道裏千家秘書役）

今年度から始まった「お茶とキリスト教研究会」第1回が4月2日（土）にありました。参加者は19名で、第1部は、聖書黙想会（担当は春名）。第2部は、お茶体験（お点前は松本典子先生）。第3部は、



小林哲夫先生による講演「お茶とキリスト教」でした。

聖書黙想会では、マタイ福音書10：40～42を黙想し「冷たい水」はお茶の準備、客を迎える心と同じであるという理解を共有しま

した。

お点前は、9人と8人の2グループに分かれて清心庵に入り、それぞれ30分の限りあるお席でしたが、好評でした。

小林哲夫先生の講演は、ご自分がどうしてお茶と関わりを持つようになったかという話から始まって、お茶の歴史とキリスト

教との触れ合いの可能性について話されました。文章の資料としては残っていないが、状況としては限りなく千利休とキリシタンの触れ合いは可能性が深いと考えられるというお話でありました。小林先生のご講演を聴いた参加者からは「これまで自分はクリスチャンなのにお茶をしていて良いのだろうか」と悩んでいたが、これからは自信を持ってお点前をします」という感想が述べられました。

（春名 康範 関西セミナーハウス活動センター所長）



《参加者アンケートから》

- ・ 今迄考えもしなかったお茶とキリスト教について学ぶ事が出来、感謝です。
- ・ 「茶道」の実際の中核に居られる方のお話を直接見聞でき、貴重な体験でした。長年茶道と教会生活を別々にただただ続けて来ましたが、接点が見つかり、よかったです。気、体力がつづく限り、続ける希望がもてました。

2010年度 神学生交流会 第1回「また集まろう」

2010年5月8日（土）13:30～17:00

講師：韓 守信（日本基督教団長岡京教会牧師）

3月に行われた第2回神学生交流プログラムに参加した人を中心に、関西の神学校の学生が交流プログラム以外にも「出会い」と「学び」を継続できるように機会を設定したもので、初めての開催である。

今回の顔ぶれは、第2回神学生交流プログラムに参加した4人の他に、前年の第1回に参加した1人、神学生交流プログラムは未経験だが関心を持っている5人が参加された。学校別で言うと、関西学院大学神学部が7人、同志社大学神学部が3人であった。日程の都合で、参加できないことを惜しんだ学校もあった。

開会礼拝に続いて、第2回神学生交流

プログラムの振り返りを行った後、若手牧師の牧会現場からの話として、日本基督教団長岡京教会牧師韓守信先生の講演を聞いた。神学生たちに、献身者として現場に立つことの喜びを共感的に伝えることが出来たと思われる。参加者は大変喜んで、秋にも開催したいという希望が出された。



終了後、焼き芋と焼きタケノコを囲んで交流を深めた。

(春名康範)

2010年度 修学院フォーラム「福祉と聖書のこころ」 第1回

「福祉の原点—この究め難い弱さの秘義」 (マルコ1:40-45)

2010年5月14日(金) 18:00 ~5月15日(土) 12:00

講師：岡山 孝太郎 (日本キリスト教社会福祉学会副会長)

このプログラムは、昨年度に引き続いて、福祉が寄って立つべき思想的原点を、聖書を深く学ぶことから考えようとするものであり、岡山孝太郎牧師を講師に、マルコによる福音書をテキストに今年度4回開かれる。第1回は1泊2日の会であった。

マルコによる福音書1章40-45節には、ハンセン病により周囲の人たちから遠ざけられ、絶望の中に捨て置かれてきた一人の男と、彼に近寄り、手をさし伸べられたイエスの物語りが記されている。講師は、この物語の中に福祉の原点が示されているとして、次のように語った。

ハンセン病の男は長い間、何も望み得ない状況の中にいた。しかし、彼がイエスの前に膝まづいた時、イエスは深く憐れみ、手をさし伸ばし、「きよくなれ」と言われた。その時、彼の絶望的状况は、新しいいの

ちへの起点となった。そこに、弱さの秘義がある。

弱さは、神からの賜物である。イエスは、彼を深く憐れまれた。深く憐れむとは、はらわた痛む、断腸の愛を意味する。これは神が苦難を身に負いたもうことを意味する。これにより、彼は身を清められ、人間として生きることになった。人間の弱さをいつくしみ、寄り添い給う神の信実、そこに福祉の原点がある。そこに新しい神の連れ舞いとしての新しい生き方が生まれる。



(小久保 正)

《参加者アンケートから》

- ・ゆったりした日程で、美しい新緑の中で、多くの人々と話し合うことができました。
- ・福祉の現場において、その原点・思想性を問うことも少なくなっている現実の中で、制度・施設としての福祉ではなく、「人間の絆としての福祉」を明確に聞くことができました。また、一般の聖書の解釈(注釈)には全くみられないキリスト教社会福祉の原点を学ぶこともできました。

「開発教育入門セミナー」

Think Globally, Act Locally ～「足もと」と「世界」をつなぐ～

2010年5月23日（日）10:00～16:30

講師：大槻一彦（京都市立堀川高等学校）織田雪江（同志社中学校）
籠 敦子（京都市立第四錦林小学校）塩見 登（京都市立弥栄中学校）
中江淳子（京都府総合教育センター）丸山まり子（奈良県平群町立平群北小学校）
山中信幸（柳学園中学高等学校）
会場：京都市国際交流会館

5月23日、2010年度開発教育セミナーは、「足もと」と「世界」をつなぐをテーマに、京都市国際交流会館にてJICAと共催の開発教育入門セミナーで幕を開けました。午前の部は「貿易ゲームから学ぶ」、午後は「ひとかけらのチョコレートから」のワークショップで参加者とともに学びました。

「貿易ゲームから学ぶ」には40名の参加



者があり、開発教育の定番ともいえるこの活動への関心の高さがうかがえました。貿易ゲームは地球上の国や地域が所有している富・生産手段・資源などを紙や文房具に置き換え、その格差の上で製品を作り、生産額を競うゲームです。参加者は始めの合図とともに黙々と作業に打ち込みましたが、8チーム間に大きな金額の格差が生まれました。インドネシアの街角を描いたイラストから、貿易をしても地元の人々に利益がもたらされていないことがわかり、現

在の貿易が不公平な構造を持っていることに気づきました。実際に体験したことで、子どもたちを相手に取り組み時の進め方がわかったと感想が語られました。

「ひとかけらのチョコレートから」は、チョコレートの歴史、原料の産地、消費国、製造工程などをクイズで学び、実際のカカオを目の前にして、何気なく食べているチョコレートに参加者の興味がわいてきました。



生産国と消費国を白地図に表してみると、「南」と「北」に分かれており、これは地理的な位置を表すだけではなく、政治的・経済的にも不均衡な関係性が見てとれました。また、カカオ豆の産地であるガーナの農村の実態を示す資料から、カカオ農民の生活の課題や生態系への影響が明らかになり、カカオ豆が作られるようになった歴史や買い取り価格の決定方法など、多くの要因が考えられました。解決へのひとつの方法としてフェアトレードが取り組まれていることが紹介され、振り返りでは、初対面の人とも楽しく活動でき、社会システムについて考えさせられたという感想が多くありました。（丸山まり子）

《参加者アンケートから》

- ・参加型のワークでとても楽しかった。教育に関わるヒントをたくさん得られました。
- ・様々な年代のまた、分野の方々とお話し出来て楽しかったです。・視野が広がりました。
- ・開発教育とはどういうものか、少し理解できた。・豊かさとは何かをもっと考えていきたい。
- ・貿易ゲームは、後味の悪いものだった。それがなぜか考えてみたい。

2010年度 修学院フォーラム「いのちを考える」 第1回

「いのちの多様性」

2010年5月29日（土）13:30～17:30

講師：平田 義（愛隣デイサービスセンター所長）

平田さんは、同志社大学神学部を卒業するとすぐ、京都市伏見区向島の愛隣館に赴任し、そこで1984年一人住まいの体の不自由な人と出会った。彼と同じように体の不自由な人が集い、地域で安心して暮らしていけるように、まず愛隣館にエレベーターを設置しようと、食事会をし、学習会をし、行政と交渉し、募金をした。1993年ようやくエレベーターが設置されると、給食のサービスを始めるため、身体障がい者デイサービスセンターを作った。1996年には、入浴サービスを始めるため3階を増築し、重症心身障がい者デイケア事業を始めた。この活動の中で、制度がカバーしきれない多くのニーズが地域に埋もれていることに気付き、制度の限界を越えて隙間を埋める働きをしなければならないと思った。そして1999年には障がいの種別、年齢の枠をこえて必要な人に必要な支援を提供するために、向島障がい児・者地域生活支援センター「遊隣」を設立。2002年には、看護師が常駐し、医療的ケアも行える重症心身障

がい者通所事業「シサム（アイヌ語で〔隣り人〕）」を設立した。障がいを持っている人も、地域であたりまえに暮らしていけるように、今も様々な課題と取り組んでいる。

何の準備もなく、制度も整っていない状況の下で、短い時間にこれだけの施設と共感する働き人を得ることは、尋常でない苦勞を伴ったであろうと想像されるが、平田さんはその足跡をいとも軽々と、楽しそうに語った。平田さんは講演の最後に「いのち」を考えるポイントとして次の点を挙げた。

「生きるに値する命と、生きるに値しない命の区別はない。違うことこそエエこっちゃ。あるがままの姿でよい。誰もがかけがえのない命を持つ存在。与えられた命」。平田さんの行動の原点は、ここにある。原点が確かであれば、その歩みがぶれることは無い。原点と現実の乖離が平田さんを駆り立てて止まない。その熱意が共感する人の輪を広げる。そこに不可能を可能にする道が開ける。苦勞が喜びに変わる。制度が網の目のように張り巡らされているように見える今日においてもなお、創造的な働きは可能なのだと、教えられた。

（小久保 正）



《参加者アンケートから》

- ・障がい者と共に生きる事のなかから、命について考えさせられた。
- ・他の人たちの考えも多く聞けた。講演だけで終わらないところが、「フォーラム」として機能していますね
- ・平田先生のお話を聞き、「行動や、実践力」が一番、福祉の仕事では大切だと感じました。考えながら動くことを実践していきたいと思います。
- ・人は支えられ、生かされていると話を聞いて、強く感じました。毎日を大切に生きていこうと改めて思いました。

2010年度 開発教育セミナー 第2回

「一緒に考えよう私たちの未来

～身近なところからはじめる国際協力～」

2010年6月19日（土）16:00～6月20日（日）12:00

講師：藤野 達也（PHD協会総主事代行）

グローバル化の進む現在、「国際協力」という言葉も頻繁に耳にする。今回のセミナーでは、国際協力の現場で30年近くNGO職員として活躍されてきた藤野達也さんを講師として迎え、私たちが社会の一員としてどのような明日をめざして「まともな国際協力」をとらえるかについて参加者が意見を出し合いながら考えを深めた。

1日目のセッション1では、はじめに参加者全員が自己紹介を兼ねて自分が思う「国際協力」について紹介し合い、「つながり」「自分の位置を確かめさせてくれるもの」「よく分からないもの」などの意見が出された。日本や他国のODAの状況について話を聞き、これまであまり知らなかった日本のODAのしくみについて知ることができた。セッション2では、講師の藤野さんより「何のために国際協力をするのか？」という問いかけがあり、藤野さんが現場で撮られた写真をスライドで見ながら、私たちの生活と国際協力の現場とを結びつけて考えた。「ものの方」ひとつで、物事の捉え方が変わることで、それによって協力や援助の方法も変わるということに気付かされた。PHD協会では、毎年途上国から日本へ研修生を受け入れ、その研修生が自分の地域に戻って自ら地域の文化や資源を生かして課題を解決するようするという「国際協力」を続けてこられた。「現地の人に一番よい選択とは何か」「誰



にとって良い協力なのか」「これでいいのか」と常に問い直しておられるという藤野さんの言葉が印象的だった。

2日目のセッション3では、「途上国の村の人が下痢になっている」「日本のある学校で途上国に文房具を送ろうとしている」「日本のある大企業がNGOとの共催で国際協力キャンペーンをしている」などと具体的な状況を設定して、ケーススタディーを行った。「その場、その時だけの援助」ではなく、何が原因となっているのかを調査することの大切さが意見として出された。「協力」と思って善意で行っていることが、実際には却って他の国や他の人々に迷惑をかけているということもありがちである。そして、他の国の課題を見ることから、自分の身近な所でも同じような課題があることに気付くということもある。「国際協力」と聞くと、国際的なNGOやODA、国連機関などが頭に浮かび、「この援助はいいけど、これはだめ」と単純に考えてしまうこともある。しかし、「遠い外国のこと」「大きなこと」だけを考えると「国際協力」「国際援助」をするのではなく、まずは私たちの足下の生活の中から世界とのつながりを見つけ、身近な所から課題解決への糸口を見つけていきたい。

（友前尚子 南丹市立園部第二小学校教諭）



《参加者アンケートから》

- ・相手(他国)に迷惑をかけないという考え方に会えた事は、これからの生活に影響があるかと思えます。
- ・最近のODA、NGOのことがきけてよかったです。 ・藤野さんの生き方にふれたことが一番。

2010年度 修学院フォーラム「福祉と聖書のこころ」 第2回

ひこばえ

「いのちの孫生—捨てられた切り株の秘義—」 (マルコ2:13-17)

2010年7月10日 (土) 13:30 ~ 17:00

講師：岡山 孝太郎 (日本キリスト教社会福祉学会副会長)

舞台は海辺(湖畔)であった。ローマ帝国の制度世界に組み込まれ、徴税人として生きざるを得なかったアルファイの子レビにとって、そこは人生の目的を喪失した果



てに逢着した場所であった。いっぽうで、そこには群衆が集まっていた。群衆もまたレビとおなじように権力支配の矛盾のなかに孤絶した人びとの集合でしかなかったのかもしれない。

表題聖書箇所(「レビを弟子にする」)は、イエス時代の物語というよりも、抉るようにして現代社会における人間の悲哀を描いている。講師によれば、福祉こそこの人間の現実を直視する営みでなければならない。この定義にしたがえば、むしろ聖書に学ぶ者の人生こそが福祉的でなければならないと考えられるのかもしれない。

レビは、通りがかりの収税所に座っていた。ローマの平和(Pax Romana)といわれる帝国の繁栄は、権力支配による政治秩序に過ぎない。レビの居場所は、この権力がユダヤ社会を圧迫し収奪するところであった。帝国の官僚機構の下請けとしての孤独と無気力、それがかれの定位置であり、かれの実像であったのだ。だから、「わたしに従ってきなさい」というイエスの招きとレビの家での食事のエピソードは、ささや

かな同情やヒューマンズムの美德を描いているわけではない。講師によれば、そこに福祉の課題が隠されている。このエピソードを福祉の文脈において再読すれば、福祉とは、国家権力あるいは行政や政策と深くかわる営みでなければならない。レビという時代の孤絶者を介して、イエスはローマ帝国と対峙していたのである。とすれば、現代における福祉もまた、この精神を継承しながら、国家の制度と権力の構造を射程におさめたものでなければならないだろう。

その際、徴税人や罪人とともに食卓を囲むことは、イエスにとっては福音に先行する福祉の核心でもあった。正義が愛に先立つように、イエスの精神は、丈夫なひとや義人にではなく、いま病み、いま不正義に脅かされている人びとにこそ届けられるものでなければならない。福祉は、食卓という日常の営みのなかに、疎外された人びとを招き入れることで、新しい人間関係の創出しようとする意図をもつ。

昨年度の修学院フォーラム「福祉」の後継プログラムでもあり、前回(一泊)も含め、参加者の多くはすでに顔なじみでもあって、なごやかな空気のなかで終始した。ティータイムをはさみ、質疑の時間においては、参加者各人が置かれた状況と重ねての発言や講師への質問が相次ぎ、講師による聖書の読み解きはいっそう深められ共有された。参加は16名であったが、次回の再会を約束して散会した。

(中村 信博 同志社女子大学学芸学部教授)

《参加者アンケートから》

- ・新しい視点を与えられ感謝です。聖書(の読み方)を福祉の視点で、読んでみたいと思います。
- ・聖書の中で主イエスと対面する、また食を共にし、喜びを分つように招かれた喜びが近くに感じられました。
- ・岡山先生の深いメッセージがすばらしかったです。

2010年度 修学院フォーラム「日本はどこへ行くか」 第1回

「<いのちの神学>の可能性 ～現代キリスト者の責任とは～」

2010年7月17日（土） 13:30～17:30 談話会 18:00～20:00

講師：西原 廉太（立教大学副総長）

環境問題を関西活動センターの中核プログラムの一つに据えるに際し、立つべき場所を明確にするために、このプログラムは組まれた。講師には、世界教会協議会（WCC）中央委員として、正義・平和・創造の保全の主題の下で、世界の諸教会と共同でこの問題と取り組んでこられた西原廉太さんを迎えた。西原さんは、立教大学でキリスト教学担当の教授の務めると共に、同大学副総長として重責を担う傍ら、長野県岡谷市にある岡谷聖バルナバ教会の管理牧師としての務めも負っておられる。



西原さんは、まず1968年にリン・ホワイト・ジュニアが「機械と神」の中で展開した「近代科学技術文明はキリスト教を胎として生まれた故に、現代の生態学的危機に対して、キリスト教と科学は同罪である」との主張を紹介し、コペルニクスを例に、近代科学の発達が神学者によって先導されたことを示した。

こうした流れの中で現代のキリスト教は、今日次のように認識するに至っていると、WCCの見解を紹介した。「神は人間とのみ契約を交わしたのではなく、この地上のすべての生きものと契約を結んでいる。

教会はキリスト教自身が推奨してきた消費主義と、人間が地球を支配することを承認した神学を維持し続けることによって、このエコロジカルな危機をもたらした歴史的共犯者となった。しかし、人間は決して他の被造物を支配することを許されていない。教会は、より謙遜な神学を求め、環境倫理を探求し、他の宗教諸伝統から深く学ばなければならない。それは「包括的な共同体」の実現のためにキリスト者が果たすべき責任である。北半球の政治的、経済的力を持つ先進国は、弱い南半球の貧しい国の人々や先住民からエコロジカルな負債を負っているばかりでなく、現代の世代は未来の世代からも負債を負っており、教会はこれらのエコロジカルな負債を解消する責任を負っている」

その上で、キリスト者は、貧しくされた民衆の立場に立つことを明確にし、この課題と積極的に取り組むようにと勧めた。その際、南アフリカの人種差別撤廃や、韓国の民主化において、キリスト者のネットワークが有効な力を発揮したこと、教会は全世界にコンビニエンスストアをしのぐネットワークを持っていることを思い起こすようにと指摘した。そして最後に、すでに13世紀にアシジのフランシスによって、この面でイエス・キリストにある先導的な生き方が示されていたことを紹介した。（小久保 正）

《参加者アンケートから》

- ・新しい視点で「いのち」の神学を考えることができた。
- ・全地球に対するPastral careが、神より人に与えられているmissionであるということの認識が与えられた。

2010年度 開発教育セミナー 第3回

「ファシリテーターのためのスキルアップ講座
～教育・市民活動・国際協力の現場で求められるもの～」

2010年7月24日（土）16:00～7月25日（日）12:00

講師：中田 豊一（参加型開発研究所所長）

ファシリテーターとは、ワークショップの進行役や地域おこしの促進者をさすが、国際協力の現場で中田豊一さんが発見した対話型ファシリテーションは、何のためのファシリテーターかを深く考えさせてくれるものだった。

たとえば途上国の村で「このいちばんの問題は何か？」と尋ねて返って来た答をもとにプロジェクトを始めても、継続しないということがある。中田さんは、村人に責任転嫁するのではなく、本当にそれが問題だったのかと自問した。そしてNGOソムニード代表の和田信明さんに触発され、相手の意見ではなく事実を聞く、相手がセルフエスティームを維持しつつ結論にいたるまで待つという手法を見いだした。以来、簡単な事実しか聞かないのいつのまにか相手が本音を口にしたり、本当の問題に気づいて動き始めたりということがおこるようになった。人はだれも、自分の問題を分析できない。だから対話を通して思い出させてくれるファシリテーターが必要なのである。



セミナーでは、この簡単な事実質問を続ける練習をした。そして、そもそも途上国と先進国とは何が違うのかを考えた。中田さんは、強い企業の存在、つまり近代化の度合いをあげた。自給自足の社会には、相互扶助と自然資源というセーフティネットがある。産業化すると、これを金融や行政がカバーするが、中途半端な移行期にはここからこぼれ落ちてしまう人が出る。これが貧困である。高等教育の推進が、結果的に企業を潤し、自然を消耗させて伝統的なセーフティネットを細らせている現実を、教育に関わる者は自覚しなければと思った。

(金山 顕子 京都府立桃山高等学校教諭)



《参加者アンケートから》

- ・非常に内容の濃いセミナーでした。事実質問の「テクニック」をうまく活用したいです。
- ・ファシリテーションの意味、参加者自身の気づきから行動変化への核心を改めて思い返せました。対話的ファシリテーションをもっと学びたいと思いました。

2010年度 修学院フォーラム「日本はどこへ行くか」 第2回

「日本におけるキリスト教の可能性」

2010年8月28日(土) 13:30~17:30 談話会 18:00~21:00

講師：佐藤 優 (元外交官、文筆家)



今年度の新企画「日本はどこへ行くのか」第2回が盛況に開催されました。参加者は、第1部(講演と質疑応答)が118人で、第2部(夕食後の懇談会)が34人でした。人間と母校同志社を愛する思

いが滲み出てくるような講演でした。紙面の関係で十分にはご報告できませんが、司会をした者としてつまみ食いのようなのですがまとめてみました。不十分でも、赦して下さい。

「私は、学生時代にフロマードカを読んで「宣教のフィールドはこの世界である」と強く教えられました。「人間になるための福音」、「神学は旅人の神学」という考えに共感して外交官になりました。この世

界は、政治権力者の都合で、勝手に事件はでっち上げられるし、思想や信仰は権力者の思い通りに弾圧されてきたところです。

フロマードカは、チェコで抵抗運動をして投獄されても人間の顔をした社会主義を作ろうとした人です。私は、このフロマードカのことを調べてみようとしてシュペネマン先生の助けを受けました。シュペネマン先生は私を東ドイツに留学することを勧めてくれましたが、私は外交官になってチェコに行くことを選びました。

私の理解では、昔の日本の官僚は天皇のためというエートスがあったかもしれないが、戦後の日本社会では抽象的な『国家』のためというところで具体性がないために、官僚達は自分のために自分の能力を使っているとしか言えない実態になっています。

しかし、キリスト教は目に見えないものをキリストのゆえに見えるものとし、自分の能力を自分のためではなく他人のために使うことへといざなうものですから、キリスト者は異なった倫理観の下に生きるべきです。シュペネマン先生から『外交官になっても、それを忘れないように』と言われました。人間は、絶対者なる神の前に立つことによってのみ自分を絶対化しないで悔い改めることが出来、真の平和を構築してゆくような新しい倫理観を持つ者となることが出来ると思います。



日本のキリスト教会は、歴史的に社会の中産階級、社会の中の上というところに自分の立ち位置を置いてきましたが、それによって生命力を失ってきました。今や日本に於けるキリスト教の影響力は少なくなり、生命力は枯渇して文化的には意味を失ってきているかのようです。しかし、聖書の教えに立ち返って真に個別具体的な問題に関わりながら、悔い改めて国家や文明と一体化するのではなく、啓示によるイデオロギーと一体化するならば、キリスト教はこの国でたとえ少数者であり続けても意味があります。

共産主義社会においても神に出会っていった人々によって社会を変革していく歴史が刻まれました。日本に於いても同じことが言えます。日本に於けるキリスト教の可能性はどこかに転がっているものではなく、一

人ひとりの実存的な悔い改めによると考えています。」

佐藤さんは、具体的に出会ってこられた人々を紹介しながら、ユーモアを交えて話され、質疑応答の時間も一人ひとりの質問に誠実に答えられて、濃厚なものとなりました。夕食後の懇談会も時間が足りないぐらい、話が盛り上がりました。尚、当日の講演と質疑応答が文芸春秋社から出版された文春文庫「私のマルクス」に収録されていますので、ご購入ください。

(春名 康範)

《参加者アンケートから》

- ・多面的な視野でキリスト教をとらえることを学んだこと。
- ・あらゆる分野に博学で、適確に話していただきました。
- ・自分自身のこれからの生き方の、方向性を教えていただいた感じです。
- ・佐藤さんのお話は、とてもユーモアがあり、とても心にひびいてきます。
- ・話術巧みでおもしろくうかがいました。・最後の方、生の声が聞けてよかった。
- ・話された内容の密度が高く、帰ってから反芻してからでない、うまくまとまりませんが、日頃の自身のあり方をみなおす数々の視点と、示唆が与えられたと思います。

「東九条フィールドワーク

～在日コリアンの声から多文化共生社会を考える～

2010年9月4日(土) 15:00～5日(日) 12:00

講師：村木美都子(東九条まちづくりサポートセンター：まめもやし事務局長)

「韓国併合」100年のこの年、東九条まちづくりサポートセンター(まめもやし)事務局長の村木美都子さんを講師に迎え、在日コリアンのくらしを通して、これまでの100年をふりかえり、そしてこれからの私たちの社会のありようを考えました。

1日目の東九条フィールドワークでは、在日コリアン一世の張琴先さんのご自宅(東松の木団)にて、これまでの体験や思いを聞かせていただきました。13歳で来日してから、飯塚や宇部など転々としながら東九条に落ち着くまでの苦労話や、夫の遺影に向かって「アボジー、アボジー」と何回も語りかけながら話される様子に参加者は聞き入っていました。こうした一世のお話を記録に残していく「まめもやし」の活動も、改めて貴重なことだと感じました。その後、村木さんの案内で40番地鴨川堤防、九条大橋、市営住宅などを歩き、韓国料理店で夕食をとってセミナーハウスへと向かいました。

第1セッションでは、在日コリアンの歴史に関する写真を用いたワークのあと、村木さんから「東九条の歴史と今」についてお話してもらいました。1950年頃から鴨川堤防に住宅が増え始め、住民たちはインフラの不備によるさまざまな生活の苦労を重ね、水害や火災も度々経験したそうです。また、当時の写真には、せまい通路にハルモニたちがたたずみ、河川敷では農

業が営まれている姿が映し出され、徐々にコミュニティが形成されていたことがわかりました。



翌日の第2セッションでは、村木さんから「まめもやし」が現在行っている東松の木団地での生活支援の活動について具体的にお話いただきました。

堤防から新しく建設された松の木団地に移り住んでも、以前のコミュニティの継承に努め、家族など身近な人がいない場合にも、見守りをするなどで在日高齢者の孤独死を防いだり、申請主義の行政のサービスとつないだりするなどの様々な活動を行っており、「無縁社会」と言われる現代社会における新しいコミュニティづくりのモデルのように思えました。お話を受けて、自分にできることというお題でそれぞれが考えたあと、そのテーマにそってグループに分かれ、コミュニティづくりのアイデアや人権学習プログラムづくりに取り組み、発表し合いました。



支援の中で「出会い、違いを知り、ぶつかり、認める」という日々の取り組みが本当の意味での多文化共生をつくり出すという姿勢や、一世の人たちに最後まで寄り

添うという思いを持って活動されている村木さんに感銘を受け、多くの参加者が自分自身の親の介護のことや仕事のことなどをふりかえる深い学びのある回となりました。

織田 雪江(同志社中学校教諭)

《参加者アンケートから》

- ・ フィールドワークもあり、実際にお話を聞いたり、街を歩くことができ、充実した内容だったと思います。
- ・ 熱心に取り組まれている様子を見て、元気をもらった気がします。

2010年度 修学院フォーラム「福祉と聖書のこころ」 第3回
「いのちの沈黙—はげしい怒りの秘義—」 (マルコ3:1-6)

2010年9月18日(土) 13:30～17:00

講師：岡山 孝太郎 (日本キリスト教社会福祉学会副会長)

われわれは、どれほど常識に囚われて生きているだろうか。厳粛な空気のなかで礼拝を守っているわれわれの教会に、もし突然にこの場にいるはずのないひとが、だれかに「真ん中に立ちなさい」と促されてやってきたら、にわかに事態の意味を理解することができるだろうか。

マルコ福音書では、場所は教会ではなくユダヤ教の会堂であり、厳粛な礼拝は安息日、そしているはずのないひとは手の萎えたひととされている。間違っているのは、衆目はイエスの治癒行為を疑っているのではない。それが安息日という聖なる時間のなかで為されようとしていることを危惧しているのだ。

講師は、今回もまたいつものように聖書を逐語的に精読し、しばしば原語の意味を含めて読み解いてくださった。「萎えた」の原意は「干からびる」「乾燥する」であり、それは「生命遮断」を連想させる。敷衍すれば、手の萎えたひとは、身体の特定期間における障がいの問題とされているのではないのかもしれない。この物語は、人間の生命活動そのものが瀕している死への予感を内包して語られているのだ。そのために、こうはいくつかの俳句も引用しながら、死の予感を生きる人間の現実も浮き彫りにして講演をすすめられた。

会堂は、この手の萎えたひとにとって最終の逢着地であったかもしれない。けれども、イエスはそこで「真ん中に立つように」と促されたのだ。「立つ」とは原語では、「復活」(マルコ六章六節)と同

語が用いられている。きわめて示唆的だ。このひとが、真ん中に立つことは、このひとの人生そのものの復活を意味するからだ。

とすると、手の萎えたひとの「生」を疎外し、その生を「死」へと追いやろうとするものはなにか。それこそ、生の本質から目を背けて、安息日律法の厳守という「常識」から事態を判定しようとする周囲の陰湿な目であるのかもしれない。衆目が集まる「真ん中」はしたがって、人間の常識が堆積した場所であり、いまその常識によって「生」を奪われたひとがその場に復権しようとしたと考えるべきなのかもしれない。

講師は、福祉は社会の常識への挑戦であると強調された。講師のこの言葉に促され、励まされるようにして、ティーブレイク後は、参加者の多くがそれぞれに抱える問題をはなしあうことができた。話題は福祉、教育、行政、施設経営、貧困、アジアなど多岐に及んだが、そのひとつひとつが常識によって枯渇してしまった生の回復を願う祈りにも似て分かち合われたような気がしてならない。

講師は、福祉とは、富(とみ)を喜びにと変換する営みであり、聖書もまた反復して喜びを訴えている(フィリピ四章四節)と訴えられた。そして、「人々の福祉は最高の法律である」(J・ロック)を考えれば、「きずな」の喪失が叫ばれるこの時代こそ、真実の「喜び」を求めて聖書を学ぶときとしなければとおもう。参加者は16名。次回、本年度の最終回での再会を約束して散会した。(中村 信博)

《参加者アンケートから》

- ・聖書の御言葉が福祉に生かされる読み方、考え方、いのちにつながる福祉。
- ・日頃の業務において行きづまったり、つらい時、価値観を変えることができる。
- ・身近な問題としてとらえられた。

2010年度 お茶とキリスト教研究会 第2回

「16世紀のヨーロッパから来た宣教師の見た禅、茶は彼らに どう映ったか ―禅、茶とキリスト教の精神的共通性について―」

2010年9月22日（水）13:30～17:00

講師：鳥居 興彦（ジェイアール京都伊勢丹常勤監査役）

この会は、毎回3部構成で、第1部「聖書の黙想と学びの会」、第2部「お茶室体験」、第3部「お茶とキリスト教についての講演会」で開催しています。

今年度の1回は4月2日に裏千家秘書役小林哲夫氏をお招きして「お茶とキリスト教の関わり」についてお話を伺いました。

そして、9月22日、第2回「お茶とキリスト教研究会」が開催されました。講師は、ジェイアール京都伊勢丹常勤監査役の鳥居興彦氏で、カトリック教会の信徒であられることからミサのカリスと清める仕草とお茶の茶巾の使い方の共通点が気になり、長年お茶とキリスト教の関係について調べてこられた方です。

鳥居興彦氏は、まず15世紀後半～17世紀初めにかけての日本に於けるキリスト教の活動に関する文献について説明なさり、それらの中に記されている利休と宣教師の見た禅やお茶に関する記録を掘り起こしながら、キリスト教とお茶、禅とお茶、キリスト教と禅の関わりを解き明かされました。

年代的には、お茶の確立をした村田珠光と千利休と武野紹鷗は同時代の人であり、1549年にザビエルが日本に来たことからキリシタンとの接触の可能性は否定できません。利休の7人の高弟のうち5人がキリシタン大名

であった事を考えると、キリスト教と茶道は深い関係にあったことが伺われます。茶の茶巾の使い方とミサのカリスを清める仕草が瓜二つであること、狭い門から入れという戒めとにじり口から茶室に入ること、野の花を飾ること、貧しさを大事にすることと「わび」「さび」の考え方、お濃茶の回し飲みとミサのブドウ酒の回し飲み、茶室での身分の分け隔てなき平等性、など沢山の類似点をキリスト教と茶道に見ることが出来ます。

他方、禅は宇宙は無であること、自分は何者であるかを悟るために座禅を組むのであるが、キリスト教の黙想の目的も宇宙の中の秩序を知ることと自分の中の神を知ることではありますが、共通性が高い。宣教師たちは禅とお茶を見て、神との合一という共通点を見出し、これは礼拝であると考えたとしても不思議ではありません。当時の禅宗の僧侶の中から多くの僧侶がキリシタンになったことも学問好きな禅宗の僧侶らしさが原因ではなく、求めていたものの共通性が原因ではないかと思われます。現在でも、修道女や神父、牧師で座禅をする人が多くおられます。

禅と茶とキリスト教は共通点が多いが、影響されたとか、真似たということよりも、高度に洗練された「道」として深いところで共通点を持ってしまったということを見逃してはならないという鳥居興彦氏の指摘は、興味深いものでした。



《参加者アンケートから》

- ・15～17世紀初めの茶道を中心とした文献の紹介の多さと当時の緊張し、求道の強い時代を感じました。
- ・お茶室清心庵での風炉点前では、色々とお話を聞かせていただきながら、質問にもお答えいただき、ゆっくり風炉茶を楽しむことが出来ました。

2010年度 修学院フォーラム「日本はどこへ行くか」 第3回

「ポスト資本主義の行方」

2010年10月2日（土）13:30～17:30

講師：浜 矩子（同志社大学大学院ビジネス研究科教授、エコノミスト）

リーマンショック以来「資本主義とは何か」ということが改めて問われ、世界的な不況と経済活動の行き詰まりの中で、次の世界の基軸になるものは何かを問うことをねらいに定めて、このフォーラムを企画した。



講師は、まず資本主義の歴史を解説し、①現代はマルクスが定義した「国民国家」という資本主義の枠を超えて、グローバルな時代となったことがポスト資本主義を考察しなければならない第一要素である。②資本

と労働者の間に「経営者」という存在が入ってきたことが、労働者の中にも相対立する存在を生み出し、非人間化を促進させた。③コンピューターによる情報革命が世界中が同時に影響を受ける狭い地球にした。④金融恐慌だけでなく国家の財政恐慌が起こり始めている。⑤国家主義的な考え方というものが足枷になりつつあるという5つのポイントを話された。そして、これからはグローバルな全体主義の立場に立って、自分の会社や自分の国さえ良ければ良いという考えを捨てて、逆に「あなたさえ

良ければいい」という隣人愛の哲学で経済を考えていかなければならないと勧められた。最近、わが国は日銀が為替介入をして円高を止めようとしたり、国家戦略局を創設したり、「戦略的互惠関係の構築」というようなことを言い出しているが、時代錯誤であると、言われた。

質疑応答の時間には、ほとんどの人が発言したのではないかと思われるほどで、時間いっぱい質疑応答で経過した。今回のフォーラムで「経済」というものは金儲けのことではなく、如何に人間として生きるのかという問題であるという認識が参加者に伝わったのではないかと思われる。アカデミーのプログラムらしいよいフォーラムであった。参加者は、35名であった。

講師のご家族が病気になられ、急ぎ東京にお帰りになり、夕食後の話し合いの時間を持てなかったことは残念なことであった。

（春名 康範）



《参加者アンケートから》

- ・資本主義の将来への方向を示していただき、希望を抱かせた。・錯そうした経済の様子がよく整理された。
- ・色んな質問に対応した説明は素晴らしかった。
- ・現状分析から展望に結びつけるところがよかった。キリスト者個人の生き方の方向性を示されました。

2010年度 修学院フォーラム「いのちを考える」 第2回

「トラウマとしての「性」、聖なるものとしての「性」

2010年10月23日（土）13:30～17:30 談話会 18:00～20:00

講師：富永 国比古（ロマリンダクリニック院長）

富永さんは、長年産婦人科の臨床医として様々な悩みを抱える女性の相談に乗ってこられた。その経験から、最近子供に対する性的虐待、レイプトラウマ、人工妊娠中絶後のトラウマ、セックス依存症などの性的トラウマや、性感染症がいかに増え、深刻化しているかを紹介し、これらが人間の存在を根底から揺るがしていると述べられた。また、これら女性のカウンセリングに当たっていると、性は人格の中核にあるとあらためて感じ、さらに性的トラウマは、人間が生涯に受けるであろう幾多のトラウマの中で、最も深刻なトラウマの一つであると感じると述べられた。



その背景には、短期間にパートナーを変えたり、同時に多数のパートナーと付き合うことが、なかば常習化しつつある現状があり、その原因には、貧困や差別、家庭での無視や児童虐待も挙げられるが、数兆円規模となっている性風俗産業や、性情報の氾濫が、性に関する社会の規範を壊してしまっていることが根本的原因にあると、指摘された。

学校では、コンドームや、ピル、あるいは小学生に対するHIVワクチンの集団接種など、いわゆる安全な性行為―「セーフセックス」を骨子とした教育が行われており、性を「人格的な交わりの性」としてとらえる視点の教育はほとんど行われていない。性を人格の中心におき、聖なるものとしてとらえるのでなければ、人間を性的隷属状態から解放し、人を人として生かすことはできないと強調された。

はなしあいでは、電話で性に関する悩みの相談に乗っている人、性の悩みを抱えている人と共に歩もうとしている人、大学で性教育の在り方を研究している人などもそれぞれの立場から発言し、参加者は、この問題の深さを感じた。

(小久保 正)



《参加者アンケートから》

・とても興味深く聞かせていただきました。田舎のメソジストの教会から出てきたもので、現代の神学部の性倫理についていけないでいました。先生のように発言されている方がいらっしやることにとても励まされます。

2010年度 開発教育セミナー 第5回

「だれもが人間らしく豊かに働ける社会に ～参加型で学ぼう、作ろう、私たちのワークルール～」

2010年10月30日（土）16:00～31日（日）12:00

講師：伊田 広行（立命館大学、神戸大学非常勤講師、立命館大学大学院
先端総合学術研究科非常勤講師、「ユニオンぼちぼち」副委員長）

2010年10月30日（土）～31日（日）に立命館大学、神戸大学等の非常勤講師で「ユニオンぼちぼち」副委員長をしておられる伊田広行さんを講師としてお招きし、「だれもが人間らしく豊かに働ける社会に～参加型で学ぼう、作ろう、私たちのワークルール～」と

いうテーマで学び合いました。人が物のように使い捨てられ、働いても働いても豊かになれない社会。このような社会の中で「人間らしく」生きていくためには、どうすればいいのか。様々なアクティビティを通して「働く権利」を学び、だれもが豊かに生きることができる社会とはどの

ような社会なのかを考えました。初めてセミナーに参加された方も多く、2日間を通して、それぞれのセッションに20名弱の参加がありました。

セッション1では、今、働く現場はどうなっているのかについて、参加者それぞれのくらしや健康の状況を共有しながら、ワーキングプアや過労死などの事例を通して、社会に根ざす課題を明確にしていきました。セッション2では、近著『働く』ときの完全装備～15歳から学ぶ労働者の権利～をもとにしたロールプレイを通して、労働基準法を学ぶことやユニオンなどのつながり



を持つことが、労働者が自らを守る力となることを学びました。そして、まずは大人や教員自身

がその力をつける必要があることを実感しました。

セッション3では、働き方や働く意味についてアクティビティーを通して自己の内面と向き合いました。そして、暮らしと労働の調和をさせながら、だれもがこころもからだも豊かに生きる社会のイメージをふくらませました。一人ひとりが分断される働き方の中で、今回のようなセミナーはつながりを創るのにふさわしい場であったという声がありました。そして、厳しい雇用情勢の中、働くカタチを考えるということは、それぞれの生き方をどうするのかと問われていることと同じであり、自らをふりかえりながら、働くことは生きることをじっくりと噛みしめた2日間でした。



(西上 壽一 奈良県北葛城郡上牧町立上牧小学校 教員)

《参加者アンケートから》

- ・とても、楽しい2日間でした。労働法のワークショップは、絶対授業で行いたいです。
- ・自分の生活を見直すことから、まず一歩。もっと自分のパートナーを大事にしなくては・・・と反省。
- ・交流会も、とても有意義でした。
- ・自分の内省が出来たことが、とても有意義でした。

2011年度 主催・共催プログラム

- お茶のこころと宗教のこころ
- 修学院フォーラム「福祉とこころ」
- 修学院フォーラム「いのちを考える」
- 修学院フォーラム「人と教育」
- 開発教育セミナー
- 神学生交流会
- 神学生交流プログラム

「活動センターだより」の発行に、間が開いてしまいましたことを、まずお詫び申し上げます。2010年度後半分についても早急に発行致します。今しばらくお待ちください。

今年度は、おかげさまで、多くのプログラムを開催することができました。少しずつ、参加者も増えてきて、活発な はなしあいを持たれています。多様な不安の増す現代を憂うだけでなく、共に学び考えあう場でありたいと願います。みなさまどうぞご参加ください。

新年度の準備も進んでいます。一層のご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(春名)

発行人 : 小久保 正 (関西セミナーハウス活動センター運営委員長)

発行所 : (財) 日本クリスチャン・アカデミー 関西セミナーハウス活動センター

〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町 23 電話 : 075-711-2115 FAX : 075-701-5256

E-メール : office@academy-kansai.org ホームページ : http://www.academy-kansai.org/